

いななき

青山学院大学体育会馬術部

16



創部80周年記念号

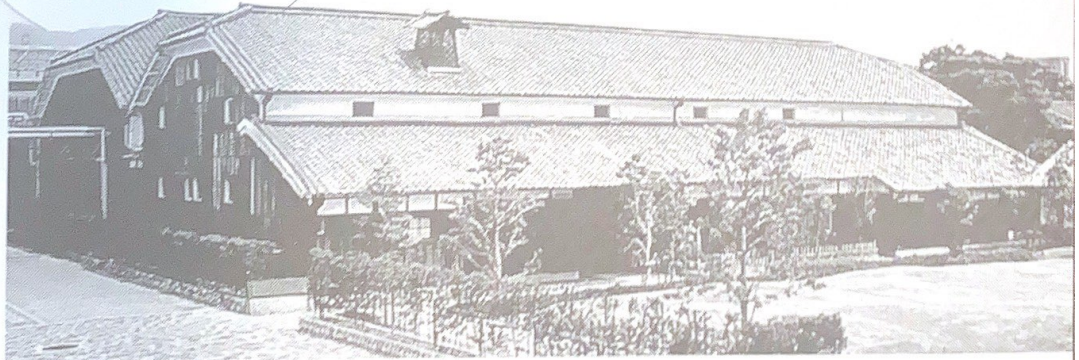


お酒は20歳になってから。
お酒はおいしく適量を。

米・水・人が原点です、白鶴。

昔の酒蔵をそのまま使った館内には、酒づくり唄が流れ、古き良き時代を思いおこさせます。昭和40年代まで実際に使われていた酒づくり道具を蔵人をモデルに再現した人形とともに展示し、お酒の歴史と文化を紹介しています。しぼりたて原酒のきき酒(無料)をはじめ、資料館限定のお酒や吟醸酒ケーキなども販売しています。

超特撰 翔雲 白鶴
純米大吟醸酒 180 瓶詰



白鶴酒造資料館

神戸市東灘区住吉南町4丁目5番5号(阪神「住吉」駅から徒歩5分) 白鶴酒造本社内 TEL(078)822-8907
開館時間 9:30~16:30(入館は16:00まで) 月曜休館(休日の場合は翌日休館) 入館無料

白鶴酒造株式会社 白鶴ホームページ <http://www.hakutsuru.co.jp/>

昭和37年卒 高倉 彰

目 次

	目 次		
第一章 緒 論	1	第二章 概 論	10
一、研究の目的	1	一、研究の目的	10
二、研究の意義	2	二、研究の意義	11
三、研究の範囲	3	三、研究の範囲	12
四、研究の方法	4	四、研究の方法	13
五、研究の進捗	5	五、研究の進捗	14
六、研究の結果	6	六、研究の結果	15
七、研究の結論	7	七、研究の結論	16
八、研究の展望	8	八、研究の展望	17
九、研究の参考文献	9	九、研究の参考文献	18
十、研究の謝辞	10	十、研究の謝辞	19
十一、研究の発表履歴	11	十一、研究の発表履歴	20
十二、研究の著作権	12	十二、研究の著作権	21
十三、研究の倫理	13	十三、研究の倫理	22
十四、研究の利益相反	14	十四、研究の利益相反	23
十五、研究の資金提供	15	十五、研究の資金提供	24
十六、研究のデータ	16	十六、研究のデータ	25
十七、研究のコード	17	十七、研究のコード	26
十八、研究の問い合わせ	18	十八、研究の問い合わせ	27
十九、研究の更新履歴	19	十九、研究の更新履歴	28
二十、研究の最終版	20	二十、研究の最終版	29
二十一、研究の最終更新	21	二十一、研究の最終更新	30
二十二、研究の最終確認	22	二十二、研究の最終確認	31
二十三、研究の最終レビュー	23	二十三、研究の最終レビュー	32
二十四、研究の最終承認	24	二十四、研究の最終承認	33
二十五、研究の最終公開	25	二十五、研究の最終公開	34
二十六、研究の最終アーカイブ	26	二十六、研究の最終アーカイブ	35
二十七、研究の最終バックアップ	27	二十七、研究の最終バックアップ	36
二十八、研究の最終復元	28	二十八、研究の最終復元	37
二十九、研究の最終削除	29	二十九、研究の最終削除	38
三十、研究の最終移行	30	三十、研究の最終移行	39
三十一、研究の最終バックアップ	31	三十一、研究の最終バックアップ	40
三十二、研究の最終復元	32	三十二、研究の最終復元	41
三十三、研究の最終削除	33	三十三、研究の最終削除	42
三十四、研究の最終移行	34	三十四、研究の最終移行	43
三十五、研究の最終バックアップ	35	三十五、研究の最終バックアップ	44
三十六、研究の最終復元	36	三十六、研究の最終復元	45
三十七、研究の最終削除	37	三十七、研究の最終削除	46
三十八、研究の最終移行	38	三十八、研究の最終移行	47
三十九、研究の最終バックアップ	39	三十九、研究の最終バックアップ	48
四十、研究の最終復元	40	四十、研究の最終復元	49
四十一、研究の最終削除	41	四十一、研究の最終削除	50
四十二、研究の最終移行	42	四十二、研究の最終移行	51
四十三、研究の最終バックアップ	43	四十三、研究の最終バックアップ	52
四十四、研究の最終復元	44	四十四、研究の最終復元	53
四十五、研究の最終削除	45	四十五、研究の最終削除	54
四十六、研究の最終移行	46	四十六、研究の最終移行	55
四十七、研究の最終バックアップ	47	四十七、研究の最終バックアップ	56
四十八、研究の最終復元	48	四十八、研究の最終復元	57
四十九、研究の最終削除	49	四十九、研究の最終削除	58
五十、研究の最終移行	50	五十、研究の最終移行	59
五十一、研究の最終バックアップ	51	五十一、研究の最終バックアップ	60
五十二、研究の最終復元	52	五十二、研究の最終復元	61
五十三、研究の最終削除	53	五十三、研究の最終削除	62
五十四、研究の最終移行	54	五十四、研究の最終移行	63
五十五、研究の最終バックアップ	55	五十五、研究の最終バックアップ	64
五十六、研究の最終復元	56	五十六、研究の最終復元	65
五十七、研究の最終削除	57	五十七、研究の最終削除	66
五十八、研究の最終移行	58	五十八、研究の最終移行	67
五十九、研究の最終バックアップ	59	五十九、研究の最終バックアップ	68
六十、研究の最終復元	60	六十、研究の最終復元	69
六十一、研究の最終削除	61	六十一、研究の最終削除	70
六十二、研究の最終移行	62	六十二、研究の最終移行	71
六十三、研究の最終バックアップ	63	六十三、研究の最終バックアップ	72
六十四、研究の最終復元	64	六十四、研究の最終復元	73
六十五、研究の最終削除	65	六十五、研究の最終削除	74
六十六、研究の最終移行	66	六十六、研究の最終移行	75
六十七、研究の最終バックアップ	67	六十七、研究の最終バックアップ	76
六十八、研究の最終復元	68	六十八、研究の最終復元	77
六十九、研究の最終削除	69	六十九、研究の最終削除	78
七十、研究の最終移行	70	七十、研究の最終移行	79
七十一、研究の最終バックアップ	71	七十一、研究の最終バックアップ	80
七十二、研究の最終復元	72	七十二、研究の最終復元	81
七十三、研究の最終削除	73	七十三、研究の最終削除	82
七十四、研究の最終移行	74	七十四、研究の最終移行	83
七十五、研究の最終バックアップ	75	七十五、研究の最終バックアップ	84
七十六、研究の最終復元	76	七十六、研究の最終復元	85
七十七、研究の最終削除	77	七十七、研究の最終削除	86
七十八、研究の最終移行	78	七十八、研究の最終移行	87
七十九、研究の最終バックアップ	79	七十九、研究の最終バックアップ	88
八十、研究の最終復元	80	八十、研究の最終復元	89
八十一、研究の最終削除	81	八十一、研究の最終削除	90
八十二、研究の最終移行	82	八十二、研究の最終移行	91
八十三、研究の最終バックアップ	83	八十三、研究の最終バックアップ	92
八十四、研究の最終復元	84	八十四、研究の最終復元	93
八十五、研究の最終削除	85	八十五、研究の最終削除	94
八十六、研究の最終移行	86	八十六、研究の最終移行	95
八十七、研究の最終バックアップ	87	八十七、研究の最終バックアップ	96
八十八、研究の最終復元	88	八十八、研究の最終復元	97
八十九、研究の最終削除	89	八十九、研究の最終削除	98
九十、研究の最終移行	90	九十、研究の最終移行	99
九十一、研究の最終バックアップ	91	九十一、研究の最終バックアップ	100
九十二、研究の最終復元	92	九十二、研究の最終復元	101
九十三、研究の最終削除	93	九十三、研究の最終削除	102
九十四、研究の最終移行	94	九十四、研究の最終移行	103
九十五、研究の最終バックアップ	95	九十五、研究の最終バックアップ	104
九十六、研究の最終復元	96	九十六、研究の最終復元	105
九十七、研究の最終削除	97	九十七、研究の最終削除	106
九十八、研究の最終移行	98	九十八、研究の最終移行	107
九十九、研究の最終バックアップ	99	九十九、研究の最終バックアップ	108
一百、研究の最終復元	100	一百、研究の最終復元	109



青蓮号のこと
 青蓮号
 青隼号(スズハヤブサ)
 青駿号
 青駿号のこと
 ショウグン号(青将号)
 青遠号
 カネシキ(青遠号)
 インキスパー号
 ブルーサンダー
 ブルーサンダー
 エクセル号の思い出
 ブルースティンガー
 ブルーフラッグ
 ブルーマリン
 ブルーマリンズ
 ペルシャンブルー
 ブルーグレース(フィアンセの思い出)
 全馬匹リスト(八十年を彩る全馬匹リスト)

宮川 容子 38
 矢作 直也 39
 宮澤 真一 40
 井上 和宣 40
 多田羅(堀川)万由美 41
 清水(高梨)文子 42
 矢作(大山)祥子 42
 込山 博幸 43
 片桐(篠崎)夏美 44
 高久 秀康 44
 渡辺 浩美 45
 佐々木 直美 46
 箭内裕二郎 47
 箭内裕二郎 47
 村上 陽子 48
 村上 陽子 48
 上原 達朗 49
 田中 英樹 49
 いななき編集委員一同 53

第三部 現役紹介

四年生 高遠あゆ子・石橋 木綿 64
 三年生 平岩 大典・澤田麻衣子・森田 浩子・福本健太郎・辰沼紗千子 64
 二年生 松本 拓也・門脇 遼・関根麻紀子・成瀬 聡・前田 文昭 65
 一年生 小河 慶祐 67
 高等部紹介 68
 馬匹紹介 69
 思い出の馬(ブルーシーズン) 高遠あゆ子 73
 活動記録 74
 平成十五年に卒業した緑鞍会一年生 75
 今年度試合予定 76
 編集後記 80

巻頭言

馬術部創立八十周年に寄せて

緑鞍会会長

新城 直樹

本年は青山学院馬術部が創立され、八十周年を迎える事ができるととなりました事は偏に学院関係者の御援助と馬術関係者の御協力の賜と感謝のほかは御座いません。

顧みますれば大正十二年春、千葉県習志野にありました陸軍騎兵連隊に故井上恒春先輩が学生有志を募り、ここで団体訓練を受けたのが始まりと聞き及んで居ります。爾来昭和のはじめに故青木真次先輩、現青山学院理事長羽坂勇先輩を始めとする傑出した先輩方の活躍により関東に青山学院ありと名を轟かしたと聞いております。

敗戦により軍に関する一切の運動部は廃止され暫くの間は部として活躍の機会がありませんでした。



昭和二六年になり学生馬術連盟に加盟せんものと静岡県御殿場の農場より馬を一頭購入し代々木の東京乗馬倶楽部に預けそこで練習をしていたのですが、ふところ事情がきつく飼育料が大変な負担とな

って参りましたので、強引に学院内に馬を持ち込み当事学校内にありました廃材を使い学生の手で馬一頭が雨露を凌げる小屋を建ててしまいました。練習はグラウンド内で乗り回して居りましたので野球部やラグビー部等からは白い目で見られて居りました。

余りに見窄らしいと思われたのでしよう、牧師の亀徳先生が学校に掛け合せて下さり、木造乍ら馬四頭を収容できる厩舎を現在大学体育館のある所に建てて下さり晴れて青山学院大学馬術部の看板を出すことが出来る様になりました。

しかしながら相変わらずの困窮生活でしたので女子部員の募集を試みようとという事になり物珍しさから拾数人の入部者が集まりこの入部金のお陰で家計が助かったものでした。併しこの人数も夏休み迄で残ったのは三名だけでした。だがこの三名が活躍し女子学生馬術連盟をつくり以後の基礎を固めたと言っても過言ではないと思っています。

今年ここに八十周年を迎えました在今后も大いに発展し百周年、二百周年を迎えられる様祈って止みません。本当にお目出度う御座いました。



会長の現役時代の貴重な絵画写真



青山学院理事長

羽坂 勇司

(昭和十六年卒)

馬術部創部八十周年に寄せて

青山学院大学体育会馬術部創部八十周年、おめでとугоいいます。

今日まで馬術部を存続させ発展させてこられた歴代部長先生・監督及び歴代緑鞍会会長以下多くのOB・OG、現役部員の方々すべてのお働きに、心から敬意を表し感謝申し上げます。

この度の相模原キャンパス開学に際し、網島総合グラウンドを閉じた後の馬場の移転につきましては、着工直前になり色々な事情から延期せざるを得ない状況にあり、皆様には大変ご迷惑をおかけしていますことをお詫び申し上げます。やがてきちんとした形で整えられると思いますので、それまでのご不便をどうかご容赦ください。

青山学院は、諸先達の献身的な努力によって継承されてきた「建学の精神」を守りつつ、来年には創立百三十周年をむかえます。馬術部も創部九十周年、百周年に向かって盛り上げてください。そのためにも、余裕ある方々は、先輩としてどのような形でもよろしいですから、現役部員の活動を支えてくださるようお願いいたします。

私も学生時代は馬術部に所属しておりましたが、そこでの経験は現在の私にとって大切な糧となっています。社会で活躍されている校友

の多くは、学生生活の中で体育会や文化連合会、ゼミ、アドグルといったグループで一所懸命に活動していた経験をお持ちです。

馬術という素晴らしいスポーツを通して得た多くの経験が、皆様の心と体を実り豊かなものとするようにお祈りいたしております。

また、現役の学生諸君も、良き伝統を守って充実した学生生活を送ってください。

馬術部の益々のご活躍とご発展、そして緑鞍会の皆様のご健勝ご活躍を心からお祈り申し上げます。



青山学院大学院長

深町 正信

馬術部創部八十周年を祝って

青山学院大学体育会馬術部が本年、創部八十周年を迎えられたことを心からお祝い申し上げます。平成五年（一九九三）に、創部七十周年記念パーティーが東京アメリカンクラブの三階にて開催され、私も皆様とともに慶びを分かちあうことが出来た時のことを今年のことのように思い起こします。

青山学院五十年史によれば、青山学院馬術部が誕生したのは大正十

二年（一九二三）のことでありました。馬術部の誕生にあたり、石坂正信院長をはじめとして、大野先生、楢田先生のご尽力により、馬術部が生まれましたが、その当初予算は百円であったと記されています。又、当時は学生部員が六二名所属しており、各種の大会で大いに活躍したとあります。

私は何度か世田谷の馬事公苑で行われた各種大会に応援に行きましたが、学生諸君が巧みな技術によって見事に馬の常歩、速歩、駆歩を披露し、巻き乗り、蛇乗り等で団体戦、個人戦で活躍されるのを見て、大変に感心いたしました。毎回、先輩方が応援に来てくださり、色々な面で指導され、又、馬術部の活動を物心両面にわたりご支援くださっていることもみますと心強く、感謝であります。

現在、練習のための馬場や馬を飼育するための馬房を新しく作るようになっていますが、適切なよい場所が与えられることを祈っています。創部八十周年を契機として、さらに、意気があがり、青山学院大学馬術部のよい伝統を継承しつつ、新しい歴史の第一歩を創めることを期待して、お祝いの言葉といたします。



青山学院大学体育会長

沼田 哲

馬術部創部八十周年を

お祝い申し上げます

体育会馬術部が、今年創部八十周年を迎えられますことを心よりお目出度うと申し上げます。

一口に八十年といっても人間の一生に相当する長い時間です。創立の頃、大正十二、三年頃には、当時の日本社会に於いて馬術部がどのように受けとめられていたのか、何かとご苦労も多かったと存じます。その後満州事変に始まり戦争が深まってゆく昭和戦前期において、騎兵というものがあり軍事色が強まる時代に、競技としての馬術が負わされたであろう苦勞、敗戦後の人間の食糧事情さえ敵しかつた中で馬の面倒をみてゆくことなど、現役の学生諸君には想像を絶することかと思えます。それらの障害を乗り越え今日を迎えられたことに敬意を表する次第です。

そこには多くのOB・OGの皆さんの強い支援があったことも改めて申す迄も無いかと存じます。

さて、私個人は、午年生まれなのですが、何故かこれ迄ほとんど馬との縁がありませんでした。記憶の中では、戦後間もない頃に、我が

家の近所に、何故か荷役の為の馬が飼われており、その荷車の後ろに乗って叱られたことがあります。足の太い頑丈そうな、それでいて眼がとても優しい馬でしたが、いつの間にか姿を見なくなりました。これが身近に馬と接した思い出ですが、その後はいきなり府中競馬場のパドックで、次々と姿を見せる美しい競走馬を眺めていたこと、に思い出もとんでしまいます。そのような次第ゆえ馬術競技とはさっぱり縁の無いまま今日に至ってしまいました。

そのような私がこうして祝辞を述べさせて頂くのも何か気恥ずかしい次第なのですが、あわせて、新キャンパス建設に際してまっ先に綱島グラウンドがなくなり、それ以来現在迄大学施設としての馬場が設けられないまま、馬術部には大変な御苦勞をかけていることを、体育会長としては申し訳なく思っています。日夜馬たちと接している現役学生諸君は勿論、監督、コーチ、OB会にも重い負担が掛かっていると感じます。

そのような状況にもかかわらず競技会等で好成绩を取っておることを伺っております。一日も早く新グラウンドが決定し、新しい馬場が出来ます様に、体育会としても学生部とともに、大学にお願いしております。

馬術部は何よりも日常、馬と共に在り、馬と心を通わせ対話しながら、且つ厳しい訓練をしている点で、人間にとって大切な思いやりの心を育てていると思います。いわば馬と共に学生諸君も成長しているわけで、素晴らしいことだと思います。

馬術部の今後益々のご発展を祈念し、九十周年、百周年への期待をこめて、お祝いの言葉に代えさせて頂きます。



国際政治経済学部教授

馬術部長

土山 實男

創部八十周年を祝って

青山学院の馬術部が創部80周年を迎えます。まことに慶びにたえません。80年という長い歴史の最後の79年目から部長を仰せつかっているわたくしは、この一年間、多くの書類に判を押してきた以外は、ほとんど部長らしいことをしてきたわけではありませんが、幸いにして、昨年2002年度は、馬術部にとっては大きい成果をあげた記念すべき年でした。

たとえば、2002年6月に馬事公苑で開かれた関東学生馬術大会で、副将の成瀬亜紀子（ブルースライアン）が障害飛越競技（個人）で優勝、主将の田中英樹（ブルースコープ）が総合馬術競技（個人）で準優勝したのを始め、9月の全日本総合馬術競技大会では、田中が堂々の4位に、オリンピック記念馬術大会では、成瀬が後藤杯4位、高遠あゆ子が4位（L/B）などの成績をおさめました。他の大会でも、田中、上原達朗、鈴木智博らが好成绩を残しています。これらの努力の甲斐あって、この3月に青山学院大学体育会から、馬術部が他の二団体とともに優秀団体に選ばれ表彰を受けるという榮譽に浴しました。同時に、成瀬亜紀子も個人として表彰されています。当日、わたくしも会場にいて、これらの学生部員を大変誇りに思った次第です。

今後も、2002年度の成績を上回る成果をあげるよう部員のさらなる努力を期待したいと思います。

しかし、馬術部をとりまく環境は必ずしもよくありません。むしろ悪いといってもいいくらいです。第一に、新相模原キャンパスの中に移転させる予定だった馬場は、結局、様々の事情から造られませんでした。その後、昨年、相模原の他の場所に、馬場をふくめたスポーツ施設を移転させる計画が進み、ほぼ実現の一手前までいって、これも最後の最後で頓挫しました。というわけで、現在、横浜市郊外にある仮の馬場から移る目処がまだ立っていません。

第二に、部員の数が減ったのも頭痛の種です。馬術部は、ただ練習するだけではなく、10数頭の馬を飼育しなければなりません。部員が10人を割ると一人ひとりの負担が重くなり、練習にも支障をきたします。また、第三に、半田学長は今までのスポーツ推薦の枠の中に「スポーツに優れたものの入学試験」という新制度を設けて、野球、ラグビー、陸上（駅伝）の三つを強化する方針です。これらの三つの部以外の運動部が割をくることが懸念されます。馬術部にもその影響が出ないか心配です。

このように、馬術部をとりまく環境は必ずしもよくありません。馬場の移転は急務で、大学側もそのことは十分承知していますが、この課題をふくめて馬術部がかかえるこれらの諸問題がある日突然好転するとも思えません。当面、この限られた条件の中で、成績をあげるしかありません。しかし、条件が必ずしもよくなくとも、競技を争う以上は勝たなければなりません。大塚まりこ監督のもと、馬術部OBの皆様の一層のご支援を得て、学生部員諸君には、80年の伝統を守って、ベストを尽くしてもらいたいと思っております。



高等部顧問

佐藤 隆一

馬術部創部八十周年によせて

”好きこそ物の上手なれ“

この言葉は、ふだん私が座右の銘として大切にしているものである。人間も生き物なので、嫌いなことにはばかり直面すると苦痛が増して段々とうんざりしてくるし、逆に好きなことに取り組むときは目も輝き、身体中から活力が湧いてくるものである。

この、好きこそ物の上手の実例にびったりをあてはまるのが、馬術部の部員諸君ではないかと思う。彼らは雨が降っても嵐が吹いてもまだ薄暗い早朝に起きて馬場に通い、厩舎のポロ拾いやそうじ、飼葉を食べさせたりといった馬の世話一般を行い、騎乗の後は馬をきれいに洗ってブラシをかけてあげるといって、けっこうな重労働を行っている。これは彼らが馬が好きで、このうえなく親しみと愛情を感じているからこそ、馬と心をひとつにできるからこそ、長く続けることができ、仕事であり、単なるスポーツの域を越えた人と馬のコミュニケーションが何といっても馬術の魅力である。

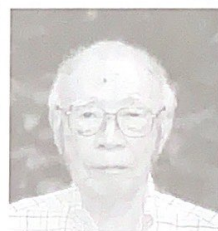
しかし、2001年3月の網島グラウンド移転に伴う同馬場の廃止により、仮の練習場となったアシエンタ乗馬学校が渋谷から余りにも遠いために、この好きなことを続けることができずに高等部の馬術部

ではやむをえずに退部をして行く生徒が出て、馬術部もその存続自体が危機に瀕することになる。

ところが、これまで70数年培ってきた青学馬術部の伝統が底力を發揮し、様々な困難のなかでふみとどまって頑張ってくれた部員やコーチ・監督・卒業生諸氏の熱意により、高等部の馬術部も息を吹き返してきた。また、馬の世話や騎乗に不馴れな高等部生に手取り足取り面倒をみて下さる大学生部員の方々にも、只々頭が下がる思いである。

2002年8月には2年ぶりに高等部の夏合宿が復活し、馬事公苑における関東高馬連の公式戦やアシエンタ乗馬学校における横浜市民大会にも次々と部員たちが元気に出場して、高等部馬術部健在を内外に示したのである。また、もうひとつの活動場所となった横浜乗馬倶楽部では、障害を持つ子供たちへの乗馬指導(RDA)の手伝いを高等部生が受け持つことになり、いわゆるボランティア活動の一環に彼らが貢献出来るという有意義な場にも恵まれることになった。

青学馬術部が創部となった1923年(大正12年)は関東大震災が起きた年である。その後日本は世界恐慌、ファシズムの時代、敗戦、戦後復興高度経済成長の時代、オイルショック、バブルの時代とその崩壊、そして21世紀への突入と、激動の時代が流れ、馬術部もこうした時代を存続してきた伝統ある部である。これまで、馬術部を献身的に支えて下さった卒業生や関係者の皆様から感謝すると共に、今後も末長く活動が続けられるように、皆で頑張っていきたいと願っております。



緑鞍会名誉会長

青木 昇

(昭和十六年卒)

祝創部八十周年

今年が青山学院が創立して百三十年になりますが、馬術部は創部より八十周年に当たります。

この記念すべき年に、体育会優秀団体として、馬術部が表彰され、又個人としても表彰者が出たことは大変喜ばしいことです。監督、コーチを始め部員諸君の日頃の精励努力の賜と心から敬意を表します。

私達が学生の頃は、自馬はなく、渋谷から路面電車の玉電に乗って、大橋迄行き、駒場の練兵場の一隅にあつた、乗馬倶楽部で練習するか、又市ヶ谷の士官学校が日曜日等の休日に、学校の馬運動の必要と、私達学生の練習と、相互の都合が重なり、馬を借りることが出来ました。今の学生諸君は自馬があり幸ですが、一方遙かに責任は重く、又半面馬との密接な交流によって、貴重な、嘗つて経験したことのない数々の賜物を得られると思います。又大学四年間の学業と併立して、馬術部で活動出来たと云う満足感は、長い人生にとって代え難い宝物となります。

辛いことも多いでしょうが、若さで乗り切って頑張ってください。

今後も前緑鞍会々長としては、諸君の試合の成果を聞かせてもらうことが楽しみの一つです。心から応援しています。



緑鞍会理事長

内藤 喜嗣

(昭和三十三年卒)

八十周年に思う

馬術部創立八十周年、おめでとうございます。振り返って見ますと、私が入部したのは昭和二九年で当時の馬術部の部員は男女合わせて三十名を越す所帯でしたが、馬匹は青姫号一頭で、経済状態も最悪で馬料屋に支払いが滞っていたので会計の藤根先輩は現金を掻き集め燕麦の調達をしていました。

また近くの豆腐屋をくどき、早朝にオカラを大バケツ二杯分けて貰った。さらに蕎麦屋の秋月の女将さんに頼み終業時に落とす茹で湯の淀み汁をこれまた大バケツ二杯を宿直当番が取りに行き夜の水飼いに割って飲ませた。寝薬も不足していたので青山通りの向かいの瀬戸物屋から荷解きの藁屑は学院の塀の中に入れて貰い使用した。

こんな状況を見兼ねたOBの発案でその年の秋に、女子校友会の食堂「どんぐり」で初めてのOB集会が開催され、支援団体のOB会「緑鞍会」が結成されました。それも来年で早五十周年に成ります。そして初代会長の青木真次氏のご指導だったと記憶していますが「学生は毎月二五日過ぎにOBの所に伺って会費五百円を徴収する」ことになった。(当時の初任給一万円)この徴収の仕事はコーヒーやお昼

を御馳走に与かり、コミニケーションが増すにつれ、社会勉強になった。これは学生にとっては楽しい思い出であった。また思わぬ産物を生んだ、不明であったOBの消息が次々と解明され当初のOBの倍近くの方から会費が戴ける様になった。

そして財政も徐々に改善され、馬匹も青翠号を岩手から調達した、しかし腰が悪く青影号と入れ替えた。次に大島先輩の紹介で秩父から青波号を購入することが出来た。

先輩に頼るだけではなく、現役でも資金の調達に渡辺君を中心に流汗のダンスパーティーを企画、部員の伊東さんのお父上のご協力でビッグバンド「シャープ・アンド・フラット」「ブルーコーツ」をメインに二年続きに豪華なパーティーが品川プリンスホテル大ホールで開催出来、借金も完済、即戦力のある神奈川国体使用馬、青嵐号、府中からはじめてのアラブの競走馬、青葉号を調達出来た。また閉鎖になった井上乘馬から調教師の阿部長治氏を迎えることが出来た。

しかし現在の青学会館の南端、東門の辺りにあった小さな馬場が幼稚園建設で閉鎖になり、イースト校舎の東にあった唯一のグラウンドをラグビー・サッカー・野球などと共用することになり、早朝堅いグラウンドでの練習はどの馬にも苛酷な脚症を強い、骨折事故にも繋がりが可哀な事であった。

そして網島の総合運動場への移転に際しての故大木院長、諸先輩のご配慮が今日の発展の基になった。付け加えるに当時の監督、部員は馬事公苑の外來馬房での仮住まい、泥田の様な馬場の改良は、OBによる多量な炭穀、砂の提供があったにせよ、体力的な使役は並大抵な事では無かったと誰もが見ていた。

今新たに移転が行われる過程に有りますが学院当局のご支援を期待してやまない。



緑鞍会幹事長

里中 郁男

(昭和四五年卒)

馬術部創立八十周年に寄せて

田坂前幹事長が長野へ転勤となった為、急遽、私が緑鞍会幹事長をお引き受けて、早9年目になります。その間、未熟な私を支えて頂きました会長、理事長はじめ理事、幹事の皆様から感謝申し上げます。

大正12年に創部されて以来、本年が80周年にあたり記念祝賀会が多くの関係者をお招きし盛大に催され、又「いななき80周年記念号」が同時に発刊されるという、まことに感慨深い、記念すべき節目の年となります。

学校当局のご理解とご支援、多くの諸先輩の血のにじむようなご努力に心からなる敬意と感謝を申し上げます。

大塚監督はじめ諸先輩のご指導のもと馬術部も年々充実の一途をたどり馬匹の向上と共に成績も目を見張るようならばらしい結果を残しておりますが問題点がないわけではありません。

その第一は馬場の件です。昭和35年に綱島総合グラウンドが開設されて以来、多くの学友が巣立った綱島馬場が平成13年3月で閉鎖されました。その後、馬術部(現役)はアシエンダ乗馬学校のご好意で現在

も当地でお世話になっております。当初、相模原キャンパス内に馬場が出来ると予定でしたが、環境問題等で近隣住民から反対され、白紙の状態となり現在に至っております。学校当局も新候補地を選定中と伺っておりますが出来るだけ早期にこの問題を解決してほしいと切望いたします。

アシエンダ乗馬学校で間借りをしている関係で、緑鞍会行事である初乗り会、パーベキューパーティーも中止せざるを得ない状況になっており、現役との交流の場も限られ、唯一総会がその窓口となっております。

その二は現役に対する資金助成についてであります。緑鞍会の目的は、会員相互の親睦をはかることは勿論のこと、現役馬術部に対する指導、援助にあると思われませんが会費の減収に伴って平成2、3年をピークに年々減少傾向にあり、ここ4、5年は年40〜50万の援助が一杯という状況にあります。

現役の年間経費は約1、000万が必要ですので、何とかその10%〜15%は助成したいと考えています。

魅力あふれる緑鞍会とは？ 気軽に参加出来る緑鞍会とは？ 誰からも愛される緑鞍会とは？ 等、今後とも幹事一同、全力で取り組んでまいれる所存でございます。会員の皆様の変わらぬご協力とご支援を切にお願い申し上げます。90年、100年と馬術部が益々発展し、この良き伝統が引き継がれますよう祈念申し上げます。